

DAIKIN

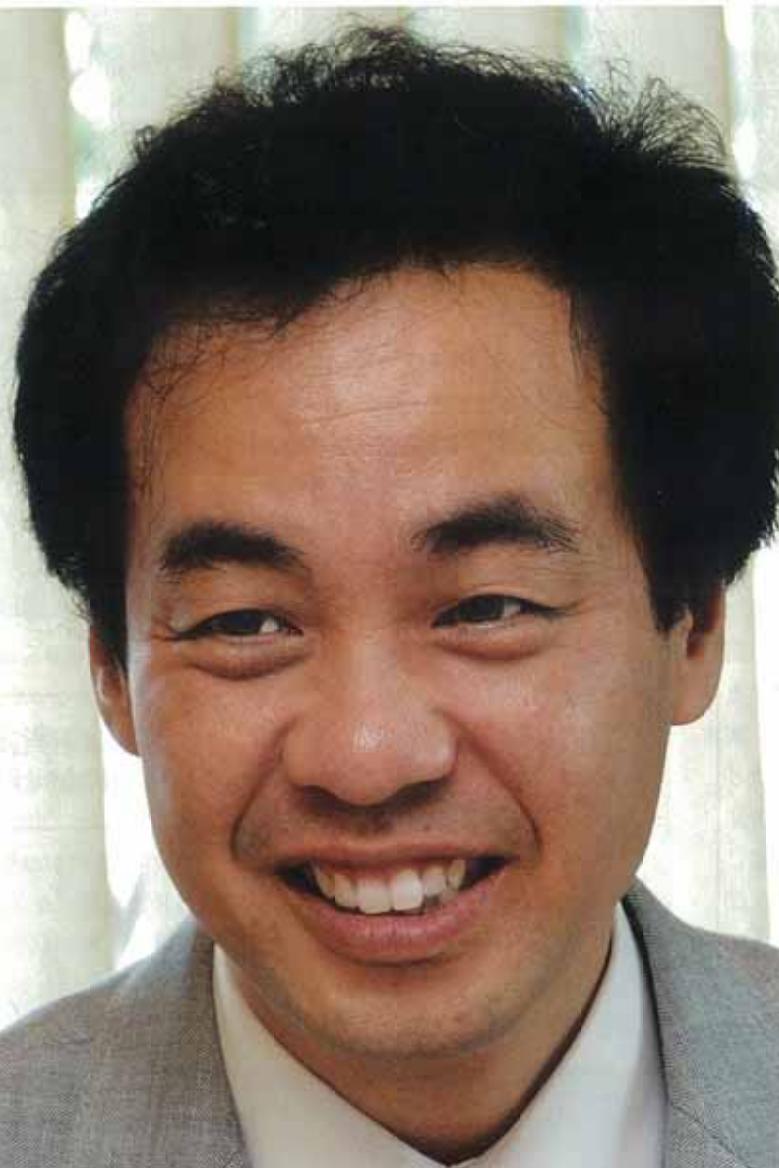
住まいの 空気まわり®

住宅会社様向け情報誌

Vol.

54

2008 September



Special Report 05

地域住宅会社における環境への取り組み 事例研究

環境共生技術を結集した

「省エネルギー住宅」のまちづくり

株式会社安成工務店様による安岡エコタウンの試み

マーケティング講座 07

出会いから着工までのプロセスと対応ポイント

DAIKINの ちょっとステキな 住まいづくり 09

加湿空気清浄機 うるおい光クリエール

TOP RUNNER 01

地域性を住まいに活かす

さぬきのいえ

「讃岐舎」

今月のトップランナー 株式会社菅組 様(香川県三豊市) 専務取締役 菅 徹夫氏

TOP RUNNER

香川県三豊市

株式会社菅組

<http://www.suga-ac.co.jp/>

専務取締役 菅 徹夫 氏



瀬戸内海に面して温暖な気候に恵まれた香川県の西部に、近隣7町が合併して誕生した三豊市。株式会社菅組は旧7町のひとつ、仁尾町で長い歴史を育んできた。現存している最も古い建築物は、弘化5年(1848年)のものだという。地域に根差した大工集団として発展してきた菅組は、現在、病院や公共施設、社寺など幅広い分野で事業を展開している。「いろいろな建築に携わっていますが、菅組の原点は木造住宅です」という同社の菅専務にお話を伺った。

讃岐を語るものでありたい
讃岐らしい街並み再生

讃岐には 讃岐の色がある

「合併して三豊市になりましたが、仁尾町の名前はちゃんと残ったんです」菅専務は、そう言って顔をほころばせる。その地域の歴史や特色を表す古くからの土地の名が、市町村合併で消えてゆくことを憂える声はあちこちで聞かれる。地名が消え、その土地ならではの街並みが消え、全国どこに行っても同じような風景しか見られない。そんな状況が広がる中で、菅組は「讃岐には讃岐の色がある」と考える。「地域性は大切です。家づくりにおいて地域性をどのように形にしていくか、それが今、考えなければならないことのひとつだと思います」菅専務は、讃岐(香川県)の地域性を見つめ直し、家づくりに活かすことを模索している。



菅組本社(三豊市)

建築は住宅に始まり、 住宅に終わる

明治42年(1909年)創業という長い歴史を持つ菅組だが、住宅を事業として本格的に展開し始めたのは、12~13年前のことである。記録が残る範囲において、江戸時代、菅組の先祖は宮大工だったようだ。



木のあらわしが美しい。

明治以降、木造公共建築を手がけるようになつたが、社寺と住宅も建てていたとされている。昭和37年(1962年)の会社設立後は、病院や店舗、文化施設などをおもに建築してきた。長く地域の建築を担ってきた菅組には強い信頼が寄せられ、特に営業せずとも年間10棟ほどは住宅建築の依頼があった。

住宅事業の本格化の経緯について、菅専務はこう語る。「これまでの仕事を評価して依頼してくださるお客様というのは、いちばん大切にしたいお客様です。ただ、公共工事の減少など時代の変化もあり、これからは住宅とリフォームをひとつの柱として、主体的に取り組んでいかなければならぬと考えました」こうして、菅組に住宅の営業マンが誕生。現在は年間10回程度、完成見学会を開催し、毎回約50組が訪れるなど積極的に住宅事業を進める。様々な事業を展開する菅組だが、もともとは大工集団である。「住宅が原点」という気持ちは、社内に脈々と受け継がれていた。“建築は住宅に始まり、住宅に終わる”そんな感覚が息づいていた社内では、「菅組の住宅は、形はいろいろあっていい。どこかに共通した菅組スピリットを感じられるものにしたい」という理想が共有されるようになった。菅組スピリット——菅専務は、それを地域性と大工の手仕事に見出した。



エコショップ併設の展示場(高松市)。

ため池、おにぎり山、 ベーハ小屋

ため池、おにぎり山、ベーハ小屋——この3つが、菅専務が考える“讃岐の原風景”である。日本最大のため池・満濃池に代表されるように、昔から雨が少なく旱魃に

悩まされてきた香川県には、現在も14,000を超えるため池がみられる。多くのため池が点在する讃岐平野には、お椀をひっくり返したような形のおにぎり山も点在し、県外から訪れた人はその風景を見て「日本昔ばなしのようですね」と驚くそうだ。県外でも比較的知られているため池とおにぎり山に比べて、香川県民にもあまり馴染みがないのが“ベーハ小屋”である。ベーハ小屋とは煙草の乾燥小屋で、現存するものは昭和30年前後に建てられたものが多いという。越屋根のある背の高い平屋の建物で、そこに米葉と呼ばれるアメリカ産の葉煙草を入れて、下に設置されたボイラーを用いて乾燥させるそうだ。

ベーハ小屋そのものは全国にあったが、讃岐の地ほど数多く残っている地域は少ない。各地のベーハ小屋は、それぞれの地域の気候風土に合わせて、その形や材料に自ずと独自性が現れてきた。「つまり、讃岐のベーハ小屋は、讃岐の土着の建築物なのです」そうおっしゃる菅専務は、これら讃岐の原風景を現代の家づくりに取り入れたいと考え、「讃岐舎」というコンセプト住宅を考案した。



ベーハ小屋

さぬきのいえ 讃岐舎

ベーハ小屋の越屋根を、光と風を取り入れる装置として現代に蘇らせた。また、日本瓦や焼杉、漆喰、四国の杉・桧など多くの伝統素材が「讃岐の風土や街並みに溶け込むこと」をテーマに採用された。同時に、断熱材としてセルロースファイバー(デコスドライ工法)を採用するなど、部材や設備にも環境にやさしく耐久性の高いものを選び抜いた。こうして、高い性能を持った



讃岐舎 施工例。ベーハ小屋に倣った外観が特徴的

現代住宅に日本の、讃岐の伝統的美学を復活させた家、「讃岐舎」が生まれた。また、讃岐舎は「木の家がいいけれど、価格が高くて手が出ない」という人に提供することも目的とした。そのため讃岐舎には、総2階、個室ができるだけ設けないなど、いくつものプランルールが設定されている。注文住宅としては一見窮屈に見えるそれは、「日本の木を使わないのでもったいない、価格がネックになっているのならチャレンジしてみよう」という菅組の挑戦なのだ。多くのルールを設けることで材の統一などを図り、木の家としては低価格での提供を実現した。3年前から始めた讃岐舎は特に若い人に支持され、現在までに30棟を建築した。

家づくりを通じて讃岐の原風景を再生したい、そんな想いに共感した人たちが集まつた“讃岐の舎づくり俱楽部”も発足した。林業家や製材所、設計者、家具職人など、家づくりに関わる様々な立場の人がメンバーだ。讃岐の舎づくり俱楽部では、毎年秋に、大黒柱伐採ツアーを開催している。6年前に初めて伐採を見た菅専務が「これを見ずに木造住宅を造ることはできない!」と感じたことから始まったツアーだ。毎回、約50人が参加し、昨年は1日で6組の家の大黒柱を伐採した。

お客様の希望を聞きながら建築するというプロセスを大切にする菅組では、お客様に合わせて、在来工法やツーバイフォー、RCなどあらゆるタイプの住宅をつくる。その中で、讃岐舎は年間3割を占めるようになった。讃岐の原風景への郷愁は、お客様の中にも確かにあるのかもしれない。

こきりこ 古木里庫

菅組スピリットを形づくるもうひとつのこだわりは、大工の手仕事である。大工集団として発展してきた菅組は、現在でも、20人いる大工全員が社員である。そして、いわゆる「いい仕事」といわれる仕事ぶりを大切にしたいという。「いい仕事とは、コンマ何ミリ以下のチリ合わせやひと鉢の入れ方、木の選び方などで、それは残念ながら、今の若いお客様にはさほど重要ではありません。けれど、そこはプロとしてこだわりたい」菅専務は、大工の手仕事の良さが伝わらない現状を悩みどころだと言いながらも、そのような技を持つ大工たちを誇らしげに語る。

先人の技と歴史を伝えたい、そんな菅組のこだわりが今年5月、新しいカタチになってスタートした。古材や古建具のリユース こきりこ 格納庫「古木里庫」である。古木里庫には、これまでなら建築解体で産業廃棄物として処分されていた木材や古建具、約300点が保管されている。実際に古材を組んだショールームも併設、地域の作家のギャラリーやキャンドルナイトをここで開催している。菅専務は、「廃棄物を減らすとともに、先人の技と歴史を垣間見ることのできる貴重な材を、再び私たちの生活の場に戻したいのです」と、これから古材活用に期待を膨らませる。



ほかの会社にも 真似してほしい

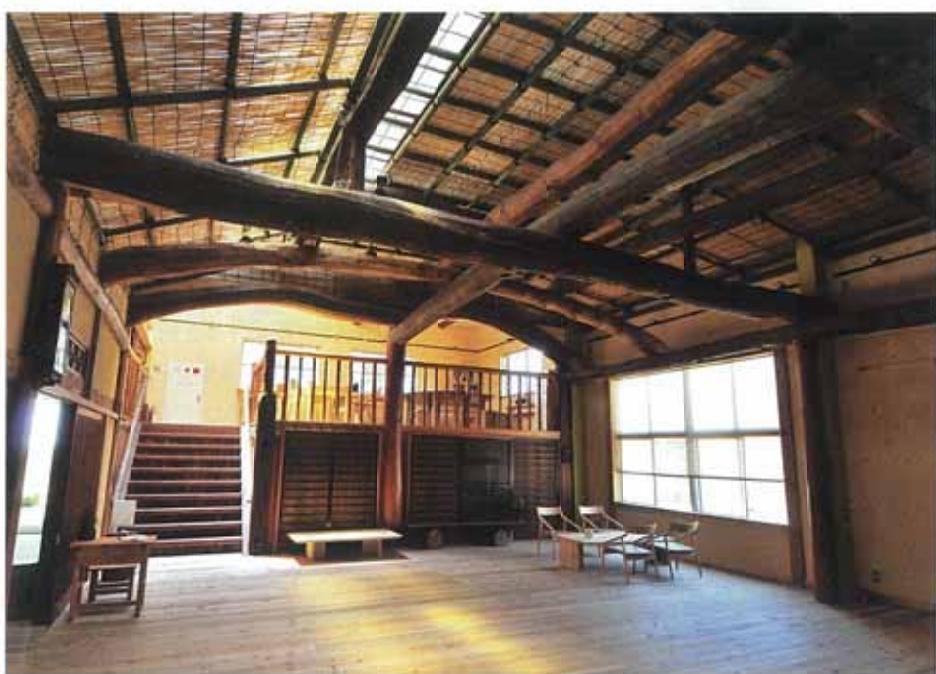
讃岐の人に、讃岐の原風景を伝える菅専務の試みは、ブログや季刊誌「あののぉ」を通じて広がっている（「あののぉ」は讃岐の方言で「あのね」という呼びかけ言葉）。菅専務のブログには、“讃岐のベーハ小屋”“讃岐のため池”“讃岐の山”“讃岐うどん”といったカテゴリが並び、自身で収集した讃岐の原風景が紹介されている。季刊誌「あののぉ」では、自らを「ビオトープ大好き人間」という菅専務が、讃岐の自然や生態系を語る連載「森里海から」が人気だ。

「最終的には、香川に入ったら香川にしか

ない街並みにしたいですね。かっこよくなくていい。これは香川にしかないという街並みにしたい」讃岐を愛する菅専務の目標だ。「それは一社でできることではありません。ほかの会社にも真似してほしいですね」

ひとつひとつの家づくりを通じて、街をつくり、その土地の風土を形づくっていく。それは地域に根差した住宅会社にしかできないことなのではないだろうか。ため池とおにぎり山が点在する風景に、讃岐舎が並ぶ。いつの日か、そんな景色が見られるかもしれない。

＊菅専務のブログ：Shop Masterのひとりごと
<http://sugakun.exblog.jp/>



古材リユース格納庫「古木里庫」

TOP RUNNER

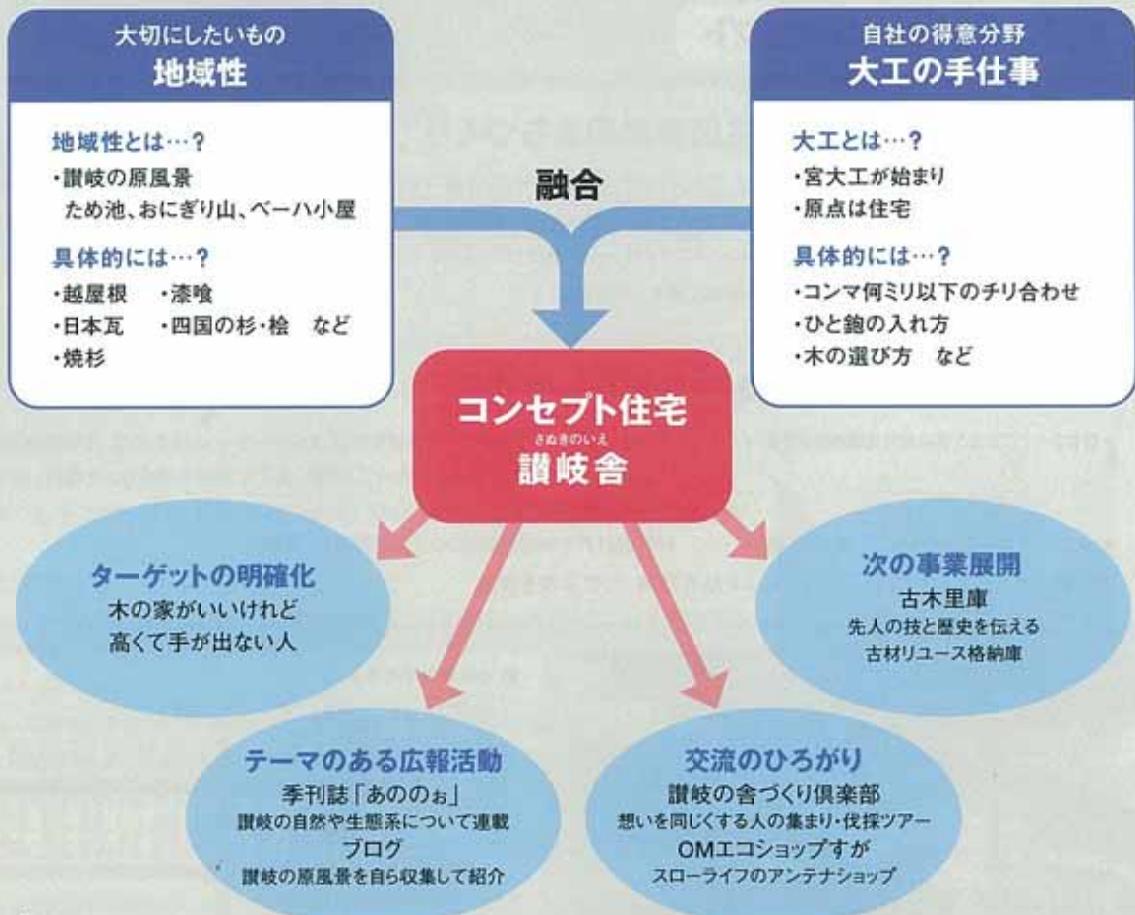
今回のポイント

▶ 身近にあって大切にしたいものを見つめ直す。 そこから自社らしさを考える。

自社の特徴を明確にして、どんなお客様にどんな住まいを提供するのかをはっきりさせたい。そう考えている住宅会社様も多いのではないでしょうか。特徴になるものとしては、工法やデザイン、材料など様々なものが考えられます。いろいろなところで勉強して、目新しい技術や考え方をなんとか採用しようと努力しているという話を聞こえています。けれども、よそで学んだことを本当に自社のものにするにはたいへんな努力が必要です。

菅組様では、自社を育ててくれた讃岐の「地域性」と自社が培ってきた「大工の手仕事」に着目。さらに、「地域性とは何なのか、大工の手仕事はどこに現れるのか」を具体的に追求し、家づくりに取り入れました。身近にあるものをじっくりと見つめ直してみる。自社の“らしさ”は、意外とそんなところから見つけられるかもしれません。

■ 株式会社菅組の場合



なじみの深いものをテーマにすると、自ずといろいろなアイディアが浮かんできます。

自社の歴史やこれまでの仕事、地域の伝統や文化など、
身の周りのものを見直してみてはいかがでしょうか。